

古今和歌集注釈書における竹取説話

“The Tale of the Bamboo Cutter”;
Considered from Commentaries on The Kokin Wakashu

飯田 さやか
Sayaka Iida

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 博士後期課程

キーワード : 竹取物語, 竹取説話, 古今和歌集注釈書

Key words : Taketori Monogatari, The tale of the Bamboo Cutter, Commentaries on The Kokin Wakashu

1. 研究目的

『竹取物語』はその成立以降、様々な文学作品に引用・受容されてきた。しかし、平安末以降それまでの『竹取物語』とは少し違った形の『竹取物語』が現れる。それらは竹取説話と称され、『海道記』を初めとして古今和歌集注釈書類や歌学書、説話集や寺社縁起類に散見され、現時点では三十弱の作品に竹取説話の収録が確認されている。これら竹取説話は、(1)古今集注、(2)寺社縁起関係、(3)『源氏物語』注釈書に現れる紹介記事の三つに大別される(奥津春雄「三つの難題と鶯姫と一竹取説話考序説一」、『徳島文理大学文学論叢』創刊号 1984.3)。(3)を除くほとんどは『竹取物語』を彷彿とさせながらも、細部は異なっていることが特徴である。特に、かぐや姫の出生と形見の品が『竹取物語』とは大きく異なっており、竹林の鶯の卵から出生する点、形見として不死の薬に加え、鏡を残す点が特徴として認められる。管見の限り(1)においては漏れなくこれらの特徴が認められる。加えて出生場面において「金色」という語が目立つ特徴も認められる。

竹取説話については主に奥津春雄氏が詳細に論じており、竹林の鶯の卵から出生することおよび金色の語に関しては、「竹幹の中から美女が生まれても、鶯の卵からかえっても、超自然的なことには変りはない。」(前掲奥津論文)と論じている。鏡を形見に残すことに関して、「面影をとどめた鏡を贈ることの方が情趣深く物語的な雰囲気があると考えられたであろう」(奥津春雄「室町末期の竹取説話一付、形見の鏡の成立一」、『徳島文理大学文学論叢』第2号 1985.3)と論じている。しかし、何れも詳細な検討にはいたっておらず、再

考の余地があると考えられる。

2. 研究実施内容

古今和歌集注釈書においては、現在『古今和歌集序聞書 三流抄』、『古今為家抄』、『頓阿序注』、『毘沙門堂本古今集注』、『了誉序注』に竹取説話が認められる。本年度は古今和歌集注釈書に限定せず、竹取説話全体からそれぞれ共通する特徴を洗い出し、形見の品について重点的に調査研究を進めた。

『竹取物語』では形見の品として文、衣、不死の薬が残されていた。その中でも物語の結末に直結する重要な役割を果たすのが不死の薬である。一方、中世竹取説話では不死の薬が残されるものは少なく、管見の限りでは三十三件(図1)のうち『海道記』、『頓阿序注』、『臥雲日伴録抜尤』、『聖徳太子伝拾遺抄』、『塵荊抄』、『富士山(謡曲)』の五件である。そのうち、『海道記』以外は全て鏡も併せて残されている。つまり竹取説話において、形見の品の主流は鏡であることが明らかである。

形見として鏡が残されることは古く、調査の結果、『古事記』より散見される例であることが明らかとなった。しかしその意味合いは時代が下るにつれて変化していき、『源氏物語』須磨に見られる例では鏡に留まる人の影を重視した表現が見て取れる。和歌においても同様の傾向が見て取れ、鏡に映る影を重視した表現が多く見られる。特に『雅有集』以降は「形見の鏡」という語が詠まれるようになった。こうして見ていくと、『竹取物語』における形見の品である不死の薬はやや異例な品であるように考えられる。多くの人々にとって理解されやすい、いわゆる一般的な形見の品として鏡

が残される説話が作られたと考えられる。

形見の鏡について調査する過程において、その中に破鏡が残される作品があることが明らかとなった。連歌の歌学書である『歌道寄合肝要集』、法華経の直談書である『一乗拾玉抄』と『法華経鷲林拾葉鈔』では、形見として破鏡が残される。古今和歌集注釈書所載の竹取説話と非常に近い内容であり、対照比較の為に調査を進めた。『歌道寄合肝要集』では、鏡は富士山そのものの由来として語られる。一方、『一乗拾玉抄』と『法華経鷲林拾葉鈔』では鏡は富士の煙の由来として語られ、古今和歌集注釈書のものと同様の結末となっている。破鏡は中国の古典に由来するものであり、『神異経』のように夫婦の離縁を象徴する品である一方、『両京新記』のように夫婦の再会を象徴するものとしても語られ、二面性を持つ。竹取説話で破鏡が残される場面の記述は「我が片身に」、「形見の為とて」、「我が形見に見玉（給）へとて」と極めて簡略であり、鏡を破鏡として残す目的はやや不明瞭である。現時点では「両京新記」などのように再会を期したものとして考えている。

	★→形見の品の記載があるもの 『作品名』	ジャンル
1	★『竹取物語』	物語
2	『顕昭陣状』	歌学書
3	『今昔物語集』	説話集
4	『袖中抄』	歌学書
5	★『海道記』	紀行文
6	『古今集注』義	古今集注釈書
7	『古今集注』信	古今集注釈書
8	★『古今為家抄』	古今集注釈書
9	★『古今和歌集序聞書 三流抄』	古今集注釈書
10	★『頓阿序注』	古今集注釈書
11	★『毘沙門堂古今集注』	古今集注釈書
12	★『了誉序注』	古今集注釈書
13	『古今和歌集大江広貞注』	古今集注釈書
14	★『曾我物語』真名本	物語
15	『詞林采葉抄』富士山	歌注釈書
16	★『三国伝記』	仏教説話

17	『桂川地蔵記』	教訓書
18	★『和歌百首註』	歌注釈書
19	『源氏物語提要』	物語注釈
20	★『臥雲日件録抜尤』	日記
21	『芝草句内岩橋』	歌集
22	『花鳥余情』	物語注釈
23	★『聖徳太子伝 拾遺抄』	説話・歌物語
24	★『塵荊抄』	説話集
25	★『一乗拾玉抄』	法華経直談書
26	★『法華経鷲林拾葉抄』	法華経直談書
27	〃	法華経直談書
28	★『聖徳太子伝正法論』慶応本	説話
29	★『歌道寄合肝要集』	歌学書(連歌)
30	★『富士山(謡曲)』	謡曲
31	『本朝神社考』	神社集
32	『国名風土記』	風土記
33	★『和漢朗詠集和談抄』	歌注釈
34	『富士山の本地』	御伽草子

図 1.

3. まとめと今後の課題

今回は、古今集注釈書の特徴でもある形見の鏡と、それに関連した破鏡について調査した。古今集注釈書に限らず、中世竹取説話全体を通しての調査研究は引き続き必要であろう。出生方法および表現の変化や求婚難題譚の消失といった問題がまだ残されているため、今後はそれらについて検証していきたい。こうした『竹取物語』とは異なる竹取説話の特徴の背景を明らかにすることで、中世期の説話の基本的な姿勢や、古今集注釈書の特性などを明らかにしていきたいと考えている。

4. この助成による発表論文等

①雑誌論文

[1]飯田さやか、「中世竹取説話における形見の鏡と破鏡説話」、大妻国文、第48号、2016、p19～38